

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



殿様蛙

— ルナールまがひ —

池畔の緑草の中に
彼草莽の臣は

土下座している

僕はそのすぐ上で口笛を

吹いたが

彼はびくともしない

こいつは聾だな

青痰を垂らして

挨拶に代えたが

依然として通じない

ぬるぬるした皮膚には

何の刺激も与えない

それならばやむをえぬ

草の葉を投げつけて

親善の意を示すばかりだ

だが突如

彼は物凄い一跳びをとんだ

とぶ先の目当てなしに

力のありつたけを後肢ではねて

花菖蒲の茂みの中に

ばさつと落ちこんだ

しかもたゞ一跳びきり

あとはかさとも音をたてぬ

彼は最後まで僕の挨拶を拒んだ

僕如き懐疑的人物、人生の敗北者流に

ものいいかけらるゝを

潔しとしなかった

草莽の臣 彼は花菖蒲の根方で

泰然と

あちらに向いて土下座している

坪井香保里

駄アーティスト

<http://gatagotrain.wix.com/happy>

1978年、愛知県生まれ。子供が無邪気に全力表現するように、不器用ながらも愉快に無心に製作するスタイルで活動しています。販売メインのイベントでは「GATAGATAGO!」の屋号で活動中。

絵について

土下座なのだが、なんだろうか、この威風堂々とした立ち振る舞い。あっぱれ!

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

殿様蛙は、危険を感じると、直ぐ水の中へ飛び込み、水底の泥の中に潜りこんでしまう。ところが、この作品の殿様蛙は、作者の親善の意に対して、物凄い一跳びを跳んだだけで、その後はじっとしているだけなのだ。土下座している殿様蛙というのも面白いが、作者を全く無視している殿様蛙も、また、何とも深くていい。

ルナールの「博物誌」には散文詩風の「蛙」と「ひきがえる」を主題にした2つの作品がある。南吉の作品は、全く彼独特の世界を作り出してはいるが、ルナールのそれに触発されて生まれたと言えよう。

文中現代では不適切と思われる表現がありますが、作品のオリジナリティを尊重し原文のまま掲載いたしました。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。